

## 新生中国に旅して

30年前の回顧と共に



川島 順  
予科21-7  
航空7-1  
(越谷市)

### はじめに

秩父100号記念特集号の編集のために古い秩父を調べているうちに、小生が秩父7号(56年5月号)に投稿した日中国交回復直後の中国訪問記が目にとまりました。この記事を読み直して見て当時のことを懐かしく思い出すと共に、最近あまりにも急激に発展を遂げている中国の30年前の姿を改めて紹介したく、秩父7号の記事を再掲載いたしました。

### 中国の発展と対日感情の変化

1979年(昭和54年)今から約30年前に初めて中国を訪れました。1972年に日中国交回復から7年後の中国は極めて貧しい国でした。戦後30年以上たっているのに、日本の復興振りに比べると全く進歩していません。我々の泊まった北京飯店のロビーや廊下の電灯は蛍の光、東京の銀座に相当する王府井(ワンフーチン)大通りの店は殆ど閉まっており、僅かに〇〇百貨店と称するスーパーがタバコと僅かな日用品を売っているだけ。夜は真っ暗で誰も歩いていない。建物は全て戦前の建物、バス

やトラックは日本の中古車、我々のためにチャーターしたバスは日本の旧持主の名前が印刷されたままでした。国産車と自慢する「大陸」と称する自動車で万里の長城に案内してくれたが、7台のうちエンジンをしないで頂上までたどり着いたのは私の乗った車だけでした。

街を歩く男女は全て人民服、全く色気はありません。唯一華を添えてくれたのは、制服にカーキ色の帽子をちょっと斜めに被った若くてチャーミングな人民軍の女の兵隊さんでした。



人民軍の女性の兵隊さん

町には、犬、猫は一匹も居ません。聞いてみると「必要ない」とのこと。えさ代が工面できないのか、食べてしまったのか、よく分かりません。しかし、町にはゴミはありません。紙がないのでゴミが出ないのです。だから新聞は壁新聞。



### 列をなして壁新聞を読む大衆

社会主義国ということで多少身構えて行きましたが、意外と日本人に対する態度は政府機関はもとより一般大衆も友好的で嫌な思いをしたことは一度もありませんでした。

中国が急に反日的になったのは1982年以降である。文部省が教科書検定で中国「侵略」を「進出」と読み替え、これをマスコミが中国、韓国に通報。両国が国家戦略の絶好の口実として捉えたからです。それが1985年の靖国参拝に飛び火しました。更に中国では1989年江沢民が党総書記長に就任してから反日教育に力を注ぎ、その影響で急速に中国一般大衆に反日感情が植え付けられました。

私は、その後、平成3（1991年）、平成13年（2001年）、平成16年（2004年）と3回中国を訪れました。

平成3年の時は通化会の皆さんと満州まで行きましたが、かなりの田舎まで自由市場（場所を政府から借り自由に商売ができる）が浸透し、あらゆる日用品雑貨や衣類が安く手に入るようになっていたが、その反面、ゴミ等の公害問題が発生し始めた。商店街の裏に廻るとゴミの山。

平成13年には、日本と変わらぬ大型のデパートが出現。一方、各地至る所「侵華…博物館」、「抗日戦争記念館」が存在し、日本軍の悪逆非道振りを宣伝している。展示されている写真は、軍刀で首を切っている写真等、みな同じもの、後は、張りぼてとパネルで説明しているだけで、史実を証明するに足りるものは殆どない。しかし、新卒と思われるガイド嬢が一生懸命説明している。これらは反日教育の成果でしょう。

平成16年には上海に行ったが、高層ビルが乱立し、世界一と自慢するテレビ塔、上海市内から上海空港まで8分で到達するリニヤモーターカー等すばらしい発展振りである。



### 上海市内から空港迄のリニヤモーターカー

戦後30年間眠っていた中国を、僅か30年で近代化に成功させ、世界第2の経済国にのし上げたことは一国の指導者の洞察力と英知が如何に国の運命を左右するかということを如実に物語っている。

次に、昭和54年頃の中国の状態を説明するために、秩父7号の拙文を再掲載いたします。

## 『新生中国に旅して』

去る12月16日（昭和54年）青山嵩<sup>⑳</sup>等の設営した東上線沿線の忘年会の席上で“秩父”の編集責任者矢野宏治<sup>㉑</sup>の指名により、中国に行った感想を書く羽目になったが、さて、何を書こうかと思案しているうちに、宴の締め括りの軍歌演習となり、“血潮と交えし”をがなり立てているうち、ふと思い当たった。

…文字同じき經典の 教えは古し孔聖が…

日本と中国とは同じ文字を使っている。今度の訪中に際し、これ程切実に感じた事はなかった。言葉が分からなくとも筆談で結構話が通ずる。小生、予科の時、中国語を学んだ事になっているが、ところが訪中に際し、慌てて日常会話集なるものを購入して開いてみたが殆ど憶えていない。時々聞き覚えのある言葉に遭遇しても、よく考えて見れば麻雀から導入されたものが大部分である。

次に、新聞に挑戦して見た。朝、ホテルの部屋に配られる人民日報を開いてみたが、拾い読みでもある程度意味が通ずるものの、思った程分らなかった。それは、日常よく使われる文字は殆ど略字になり、しかも、その略し方が日本とは全く異なっていたためである。

例えば、技術の“術”は“朮”、“豊”は“丰”、“習”は“习”の様に極端に略したものが多い。

もう一つ気が付いた点は、左横書きが大部分を占め、所々に右縦書きが残っていることである。関係者の話を聞いてみると、中国では将来漢字を廃止し、ローマ字にするということである。そのために、先ず左横書きに慣れさせ、また、漢字の画数、字

数を減らして行き、100年後には完全に漢字を廃止するという構想である。いかにも中国らしい遠大な計画であると感じる一方、折角文字を同じくする隣国のしかも本家の中国が漢字を廃止するとは、いかにも残念な気もし、それに反対する私見を述べてきた。

ところで、なぜ小生が中国を訪問したか、ここで、説明しておこう。

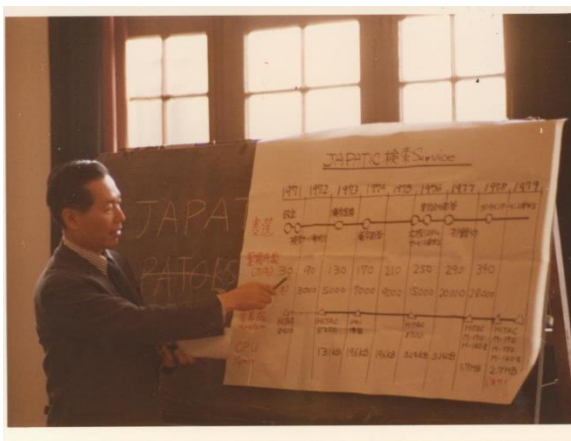
現在、中国では、鄧小平路線に沿って四つの近代化が強力に推し進められている。そのためには、外国の技術の吸収、導入が不可欠であり、外国技術を導入するためにはそれを受け入れる国内の法体系を、外国が安心して技術を提供できるように整備しなければならない。その一つとして近代諸国と交流するための特許法の制定が急務とされてきました。そこで、中国政府の要請により、時の特許庁長官を団長とする15名の専門家を含む訪中団が結成され、小生も、特許情報の専門家ということで、この一員に選ばれた訳です。なお、副団長は当時の特許庁総務部長勝谷保<sup>㉒</sup>で、凶らずも2週間に亘る中国の旅を同期生と行動を共にすることができました。



勝谷副団長と工場見学する筆者

訪問先の一つに、中国科学技術情報研究所という所が北京にあります。これは、丁度、日本のJICST（日本科学技術情報センター）に相当するものですが、一般技術文献の外に特許や規格等の専門図書館も併せ持っています。

しかも、研究所の中には、コンピュータによる情報処理を行う部門があり、漢字システムによる情報検索や索引誌の編集発行等の研究を行っていました。技術的にはまだ、初歩の段階で、規模も小さいものですが、中国で、すでにこの様な研究が行われているとは夢にも思いませんでした。しかし、丁度、私の専門にも当りますので、色々突っ込んだ意見の交換を行って来ました。



#### 日本の漢字システムについて説明する筆者

私の経験からも、コンピュータのまだ発達していなかった初期の頃は、漢字は極めて不便なもので、いっそ、漢字を廃止し、全部英語か、ローマ字にした方がよいのではないかという意見がしばしば聞かれました。ところが、近頃のように、漢字処理に関するハード及びソフトが進歩してくると、漢字ほど、コンピュータによる情報処理に便利な言葉はないとさえ思うようになって

きました。この様なことを力説し、是非とも、漢字を廃止することを思いとどまり、むしろ、日中協力して、漢字の統一、利用技術の共同開発、データベースの交換等を研究してはどうかという提案をしてきた次第であります。

さて、中国を訪れたのは四月の上旬で、北京では長い冬が去り、雪が解けて、やっと柳の芽が青づいて来た季節でした。外気も思った程寒くなく、外出するにも薄手のコートで羽織る程度で十分でした。天安門広場に集まる群集も、人民服の下の重ね着で着膨れてはいましたが、人の表情は意外と明るく、時には、電髪的女性も見受けられます。

街中の交通は、自転車が主力で、朝夕のラッシュは自転車と人の洪水で、その中を自動車、バスが警笛を鳴らして掻き分けて行きます。時たま大きな荷物を積んだ牛車が悠然と通り過ぎて行きます。街は殆ど古い建物で、スローガンの看板や壁新聞以外、広告やネオン等は殆どなく極めて殺風景です。

夜は電力事情のせいもあってホテルのロビーや廊下も薄暗く、また外も街灯が少なく、ほとんどの店が5時には閉めてしまいますので閑散としています。僅かに〇〇百貨店と称するいわゆるスーパーや外食券食堂みたいな小さな食堂が一般大衆の憩いの場所となっています。

しかし、薄暗い街頭を若いカップルが手をつないで、どこまでも歩いてゆく姿をよく見かけます。ふと物資が少なかった我々の戦後の苦しかった時代を思い浮かべたりしました。

中国航空のボーイング707で空路北京

から上海に移動しました。一面の雲海で、中国大陸や揚子江を空から見られなかったのは残念でしたが、着陸寸前、雲の切れ目から上海付近の縦横に走る大小無数のクリークと、僅かに散在する集落を望見した時、この地で悪戦苦闘した諸先輩のご苦労が偲ばれました。

上海は四月中旬のせいもあって、北京よりも遥かに暖かく、花という花が一斉に咲き乱れ、まさに春酣という感じでした。芬州（蘇州）に向かう火車（汽車）の軟席車の中からの田園風景は、青々と広がる麦畑と真っ黄色の菜の花畠が交互に続き、時々、堆肥を裏庭にうす高く積んだ農家が散在しています。

芬州に数多くある旧財閥の別荘は全て没収され、そのまま軽工業の工場か、公共機関の建物として使用されています。また、留園、獅子園等の名園は殆ど公園として人民に開放されています。桜、梅、桃、木蓮、れんぎょう、ぼたん、あやめ等、日本で見られる花は殆どすべて揃っています。この様な自然の風景を見ているうち、なにか遠い昔一度来たことがあった様な懐かしささえ覚えました。それもその筈、日本列島は、大昔、上海や福建省あたりが出っ張ってきて、太平洋上に漂い出て来たものだそうです。おそらく我々の遠い祖先は中国のどこかに住んでいたのでしょう。

だんだん話が怪しくなってきましたので、ここでもう一度雄叫に戻ります。

…四億の民は復生きじ…

ところが、中国の人口は四億どころか、今ではその倍以上の九億数千万人、約十億人だそうです。どこの町にいても、まさに人が溢れている感じです。

しかし、全員人民服を着て、極めて慎ましい食生活、日常生活に耐え、健全な生活を送っています。公園での家族団欒のお弁当は、何も入っていない白い万頭だけでした。人民用の食堂のメニューは極めて質素で、揚げパンと簡単な飲み物しかありませんでした。夜はこの食堂で国産のビールが安く飲めますが、日本の様に街頭で酔っ払って騒いでいる人は殆ど見かけません。勿論、乞食、浮浪者等一切おりません。何が十億の人民を真面目人間に変身させたのか。これだけの人間が一つの方向に向かって、黙々として働いていることに対して、何か底知れぬ恐ろしささえ感じました。

我々を案内してくれた政府関係者の一人が、十億の人民をいかにして食わせて行くかということが、中国政府の最大の問題ですと語ってくれた一言が強く印象に残っています。

（昭和54年師走記す）